



2022年6月発行 **第59号**

- 挨拶 30年後の森林・林業の姿に夢を馳せる
- 究める／広める／育てる(業務最前線)
- 知識の泉(森の話/木の話) 山村文化の基層を為すもの
- 普及指導の現場から
活力ある林業県宮城と美しい森林づくりを目指して
- 楽／学広場(イベント)
- 職員面々(赴任職員挨拶)



30年後の森林・林業の姿に夢を馳せる

宮城県林業技術総合センター
所長 齋藤 和彦

森林・林業を取り巻く環境は大きな変革期にあり、私たちの社会活動を一変させた新型コロナウイルス蔓延に端を発した「ウイルス共存型の産業振興」に対応できるデジタル技術の開発気運の高まり、第三波「ウッドショック」といわれる国産材も含めた木材の取合いに対応できる木材供給対策強化の必要性、林業の現場作業改善に貢献するドローンや無人・自動機械など省力化技術の発展、林業経営の改善に繋がる林木品種の開発、新しい木質部材を使った非住宅分野での木造化の推進など、技術革新の動きが急速化しています。このような急激な変革に対応できる、新しい森林・林業システムの体系構築が必要となっているとともに、新時代に対応できる担い手の育成も喫緊の課題です。

当センターでは、林業の短伐期化や再生林の推進に寄与するエリートツリーの開発、無花粉スギ・少花粉スギなど花粉症対策品種の開発や増産体制の構築、県産材の新たな需要開拓に繋がる新しい部材の性能解明などを進めているほか、森林調査や林業作業におけるドローン活用に向けた実証、木材流通へのICTの活用による企業間の情報共有化など、スマート林業の推進に貢献する新しい課題にも取り組んでいます。併せて、次世代の課題にも対応できる林業就業者の確保・育成に向けて「みやぎ森林・林業未来創造カレッジ」を今年度から本格開校したところであり、林業のイノベーション推進と並行して、体系的でアカデミックな育成プログラムによる次世代人材の育成も本格化していく考えです。

そのような中、常々思うことがあります。前述のような技術革新のはしりとなる動きでさえ、30年前には想像だにできなかったことでした。誌面を御覧の皆さんも同じ思いではないでしょうか。デジタル技術を含めた多様な新技術開発は、頭が固くなってしまった私には、理解が追いつかない程のスピードで進んでいると感じています。逆に言えば、このまま、技術の進展と業界への浸透が順調に続けば、30年後の森林・林業の姿は、私たちが今考えているものとは大きく変わっているのではないのでしょうか。今、正に進められているスマート林業関連技術を現場に定着・発展させていくことで、林業が3K産業でなくなることはもちろん、社会的に脚光を浴びる成長産業となるような明るい未来も期待できるのではないかと、思いを馳せているところです。

未来の林業では、例えば、森林の調査では気軽に軽装の職員が機材と記録機器を持って出かけていく、収集したデータは直ちに転送されて適切な森林整備手法が提示され、速やかに自動機械や無人機械を軸にした施業が始まる、生産情報は木材加工産業や建築メーカーと電子的に共有され、円滑な流通と部材生産により次々と木造の高層・中層ビルが建築されている、山には花粉の心配の無い良質で成長の早いスギ等の次世代資源が待機し、一方、多様な樹種からなる健康な里山が憩いの場として人々の来訪を待っている、林業就業者は最先端の技術や高度な知識を持って地域の森林管理と資源循環をリードする存在になっている、こんな夢のある林業の姿も、全くの絵空事ではない時代になってきたと感じています。

私達は、引き続き、林業の進化に貢献するような技術開発、調査、研修などに取り組み、一步でも夢に近づくよう努力していきますので、御支援をよろしくお願いいたします。



究める／広める／育てる

センター業務の柱である試験研究や普及指導、人材育成(研修)業務の最前線をご紹介します。

◎ 令和4年度林業試験研究のあらまし

本県の林業試験研究が目指す方向性として、平成31年3月に改定された宮城県林業試験研究・技術開発戦略に基づき、「林業・木材産業の一層の産業力強化をけん引する技術の開発」と「森林の持つ多面的機能のさらなる発揮に向けた技術の開発」及び「東日本大震災からの復興と発展を支える技術の開発」の3つの基本方向を掲げました。主要目標達成のため、5つの重点テーマを設定し、それぞれの重点テーマ解決に向け、重点課題5課題、新規課題3課題を含めた計11課題の個別課題について試験研究を進めています。

また、基幹計画に掲げる施策の推進に必要な人材の確保・育成を、新たに当センターの柱として位置づけ、令和2年度に設立された「みやぎ森林・林業未来創造機構」の活動をセンター全体でサポートしていくほか、試験研究部門と普及指導部門のより密接な連携を図り、試験研究成果の社会実装に向けた実証や広報活動、人材育成メニューへの反映等を進め、行政課題の解決に貢献できる効果的な試験研究成果の活用を図っていきます。

◎ 令和4年度主な試験研究課題の概要

■ 生育基盤盛土を伴うクロマツ海岸防災林の健全化に向けての調査

東日本大震災に伴う津波により壊滅的な被害を受けた海岸防災林は津波の波力減衰効果、飛砂防止、防風など複数の公益的機能を有しており、早期の復旧が求められています。宮城県沿岸部の海岸防災林は植栽が完了し、保育管理の段階に入っています。しかし、生育基盤盛土※（以下、盛土）に植栽された場合の管理事例は少なく、加えて、今回のように短期間で大面積に一斉造林を行った例もなく、適切に管理していくための情報は不足しています。このため、盛土上でのクロマツの生育状況などの調査を行っています。

盛土上での生育状況や生育環境を検証するため、土壌調査や植栽したクロマツの成長量調査を行っています。土壌調査では盛土の硬さや水の通りやすさ等がクロマツの成長に与える影響について検証しています。成長量調査ではクロマツの生育に差異が見られる箇所があるため、個体サイズの推移や土壌環境との関係分析を行っています。

また、今後の保育管理で必要とされる本数調整伐についても調査を行っています。海岸防災林は養分の少ない土壌や潮風などにより、一般的に樹木が生育するには過酷な環境であるため、通常森林に植栽する場合より高密度に植栽しています。高密度のまま成長すると樹高に対して幹が細い樹形となり、風倒等の気象害が発生しやすくなるだけでなく、公益的機能が十分に発揮されなくなる可能性があります。これを防ぐため成長に合わせた段階的な本数調整（間引き）を行い、密度を減らすことで樹高に対して幹が太い樹形に誘導する必要があります。現在は初回の本数調整伐の実施方法の検証や残したクロマツの生育状況を調査しています。



本数調整後の様子

※写真中央部のクロマツが伐採され、残存した個体が成長できる空間を作った。

※生育基盤盛土:地下水による根の伸長阻害を防ぐため山砂を用いて造成された高さ2～3mの盛土

【環境資源部 名取 史晃】

■ 雄性不稔^{ゆうせいふねん}（無花粉）スギ個体の作出と品種開発に関する研究

スギ人工林は宮城県の民有林の38%を占めており、木材の供給、水源のかん養等多様な機能を発揮しています。しかし、花粉の飛散によるスギ花粉症患者数は、国民の40%以上とも推計され、大きな社会問題になっています。そこで、センターでは花粉を全く出さない雄性不稔（無花粉）スギの品種開発に取り組んでいます。

スギの雄性不稔性は一对の劣性遺伝子によって支配され、メンデルの遺伝の法則に従って後代に遺伝することが知られています。センターではこれまでに、(国研)森林総合研究所林木育種センターが開発した雄性不稔スギ品種の「爽春」と宮城県精英樹を親に持つF1（雑種第一代）同士を交配し、F2（雑種第二代）を作出する体制を整備してきました。F2には雄性不稔個体が25%の割合で出現することが考えられます。これからは多様な系統のF2の作出と花粉調査による選抜を進め、雄性不稔個体を増加し、品種の登録に向けた成長調査等の準備を進めていきます。

【企画管理部 山崎 修宜】

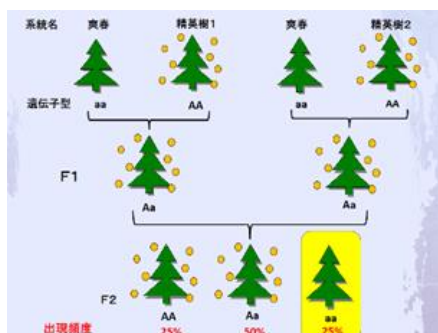


図1 雄性不稔個体作出フロー



写真1 F1同士の人工交配



写真2 無花粉個体の雄花断面

■ 萌芽更新^{ぼうが}における放射性物質調査

宮城県内のしいたけ原木林については、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故で放出された放射性物質の影響により、未だ活用が難しい状況が続いています。そのような状況を受け、被害を受けた原木林を伐採し、その後成長する次世代の木材が活用できるかどうかの判断材料の一つとするため、伐採後に発生する萌芽枝^{ぼうがし}やその周辺環境について、放射性物質濃度等を調査してきました。

その結果、放射性物質濃度は、萌芽枝が発生して数年経過すると、伐採時の立木の濃度を下回り、その後濃度の推移は穏やかになる傾向が見られました。また、空間線量率と萌芽枝の放射性物質濃度に相関関係はほとんど見られませんでした。萌芽枝に展開している葉と、萌芽枝そのものには高い相関関係が見られたことから、葉を調べることによって、萌芽枝の放射性物質濃度をある程度推測できる可能性が考えられます。

今後も調査・分析等を継続し、少しでも県内のしいたけ原木林の利用再開の一助となれるよう、邁進して参ります。

【地域支援部 目黒 渚】



調査地での萌芽枝の生育状況



知識の泉(森の話/木の話)

森林や木材に関するとおきの知識をわかりやすくご紹介いたします。

◎山村文化の基層を為すもの

本稿では、本県の林業における山の神信仰の現状について、数回に渡ってレポートします。

林業を題材にした小説「神去りなあなあ日常」は、直木賞作家の三浦しをんさんの代表的著作です。2014年には染谷将太さん主演で映画化されました。三重県中西部の架空の山村「神去村」を舞台とし、横浜出身の若者が大山主でもある林業会社で働きながら徐々に山村での暮らしに心を寄せていく物語です。枝打ちや伐倒などの森林施業に関する細かい描写は林業関係者にとっても参考になるもので、山村における人間模様や連帯感、そこで営まれる山の神への神事の有り様もまた魅力的に描かれています。特に、山自体がご神体となっている「神去山」の大祭に関する章は物語のハイライトの一つで、山にある巨木を伐り倒し、それに村人が乗り神域とされる山腹を滑り落ちるシーンは、長野県にある諏訪大社の御柱祭における「木落し」を想起させ、勇壮かつダイナミックです。

神去山には「オオヤマヅミ」が住んでいます。オオヤマヅミは、古事記では「大山津見神」であり、「津」は“の”，「見」は“神霊”を表すので、文字通り「大山の神様」です。大山津見神は、神産みにおいてイザナミノミコトとイザナミノミコトとの間に生まれました。その娘の「木花之佐久夜毘売（コノハナノサクヤビメ）」もまた山の神であり、美里町にある山神社のご祭神（安産・子育て・山の神）です。天皇家初代の神武天皇の曾祖母に当たります。

物語では、主人公の平野勇気が働く中村林業の親方の息子・山太が「神隠し」に遭います。山太を“ビューッ”と飛ばして神去山に招いたのは「赤い服を着た“きれいな”お姉さん」であり、山で遊んでくれたのは「白い服を着たお姉さん」です。前者は「木花之佐久夜毘売」、後者はその姉の「石長比売（イワナガヒメ）」をモデルにしていると思われます。神話では、大山津見神は天照大神の孫である「邇邇芸命（ニニギノミコト）」と二人の娘の結婚を望んだものの、邇邇芸命は美しい木花之佐久夜毘売とだけ結婚したとされており、物語における二人の“お姉さん”の登場、そして一方のみへの形容詞の附記は、神話の世界を連想させます。

かつては、県内各地の集落に嫁が構成する「山の神講」があり、美里町の山神社に安産祈願の代参制を行っていました（東北歴史資料館，1981）。山の神を祀る神社・石碑も県内に多数あると思われ、仙台市の秋保温泉に程近い「秋生山神社（仙台市太白区茂庭中谷地山）」には、山の神の石碑が祀られています（写真1）。自然の恵みを享受して暮らしを成り立たせてきた山村において、自然を畏れ敬う気持ちが生まれるのは至極当然なことで、山の神信仰は地域に根ざして伝承されてきた原初的な信仰と捉えられ、それ故に地域性は幅広く、山村文化の基層を為すものです。山の神講が姿を消しつつあるのは、山村の過疎化が主因と考えられますが、人々の暮らしが自然との一体感を失っていった証左とも言い得るかもしれません。

それでは、現代人の自然を捉える視点で希薄化しているものは何でしょうか。国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）では、生物多様性の保全や自然環境の保護が標榜され、それらの目標を達成するために教育現場や行政からは様々な環境教育プログラムが提供されています。そこでは、科学技術的な知見の教示とともに、自然を客体化せず畏れ敬う気持ちを醸成する視点も重要と考えられます。換言すると、先人が自然をどう捉え、接してきたか理解する視座です。自然信仰・民間信仰の衰退は、自然に対する畏敬や寛容の精神の希薄化を少なからず招いたのではないのでしょうか。山の神信仰を理解することは、知識と精神の両面で自然環境の尊重に繋がる基盤を醸成しうると言えます。

山の神信仰は様々な形態を取っており、地域・集落・職業などでご祭神が異なるなど多様性に富んでいます。民俗学においては、柳田國男を始め名だたる研究者が、山の民・里の民、ヲコゼなどの供物、産育、祖霊信仰といった多様な視点から調査・研究を試みました。広く知られているのは、山の神は春になると山から里に降りてきて農耕を見守り、秋には山へ帰って山の神になるという里の民の信仰に関する柳田の考察です（柳田國男，1914）。また、山の神は器量の悪い女神であり、1年に12人の子を産むほど多産で男性を好むというマダ

ぎの信仰も興味深いものです（高橋喜平，1991）。新潟県長岡市山古志地区では，山の神を「十二様」と呼びます（菊地章太，2008）。そして冒頭紹介した「神去りなあなあ日常」では，山の神はオオヤマヅミです。このように，山の神信仰は原初的であるが故，地域の自然や伝統に根差した多様な形態を取っているのです。その地域の山の神信仰を理解することは，先人が地域でどのような暮らしを営み，何に重きを置いて生きてきたのか知ることであります。

翻って，自然と向き合う生業である林業は，どのような精神を以て山に臨んできたのでしょうか。現在の県内の林業事業体に，「神去りなあなあ日常」で描かれた山への精神的傾注は残っているのでしょうか。それらを明らかにするために，県内 42 の林業事業体に対して，森林施業における神・祭事の実施状況に関するアンケート調査を試みました。結果は，26 事業体から回答があり（回答率 62%），年行事として山神祭などの神・祭事を実施しているのは，ちょうど半分の 13 事業体でした。本稿では，アンケート結果を順次紹介していきますが，紙幅の都合上，今回はここまでとし，次回以降，詳細な内容などをお知らせします。その過程において，本県林業における山の神信仰の特徴が解き明かされ，森林環境教育プログラムや林業教室などに投影される考察が得られれば幸甚です。

本稿は，執筆者自身が連載の全容を掴めないままスタートしました。どのような結果になるか不安であり，また楽しみでもあります。関係者の皆様からご意見・情報を幅広くいただき，柔軟に内容を構成する予定ですので，長い目でご協力をお願いしたいと思います。

なお，末筆になりますが，アンケートにご回答いただいた林業事業体の皆様に感謝申し上げます。

【企画管理部 更級 彰史】

【引用・参考文献】

三浦しをん：神去りなあなあ日常 徳間書店 2009

柳田國男：山島民譚集 甲寅叢書刊行所 1914

みちのくの山の神：高橋喜平 岩手日報社 1991

佐々木高明：山の神と日本人 洋泉社 2006

東北歴史資料館：南川の民俗 宮城県大和町南川ダム予定地域調査報告書 東北歴史資料館第 4 集 1981

柳田邦玲雄・松本武・岩岡正博：中部地方の森林組合における山の神の信仰形態の特徴と地域性 中部森林研究 No.64 73-76 2016

菊地章太：十二山ノ神の信仰と祖靈感（上） 東洋大学福祉社会開発研究創刊号 149-156 2008

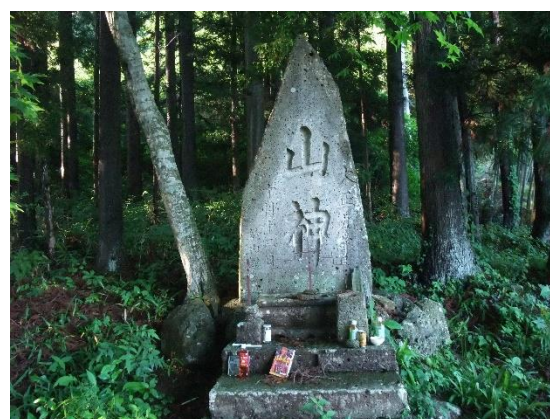


写真 1 秋生山神社のご神体（山の神の石碑） R4. 6. 12 撮影



普及指導の現場から

普及指導業務に従事している各事務所職員の活躍の様子を紹介
します。

◎活力ある林業県宮城と美しい森林づくりを目指して

○はじめに

令和3年度の林業普及活動の主な取組 27 事例は林業普及指導活動選集（令和4年3月）で紹介していますのでご覧下さい。ここでは、そのうち3事例の概要を紹介します。

○林業木材産業の一層の産業力強化（9事例）

合板原木需給体制やバイオマス活用、広葉樹の利用開拓、「苔」など地域の特性を活かした取組や原木しいたけの復興に向けた支援や指導を行いました。

事例4 生物多様性を活かす広葉樹材利用支援

加美町における多様な広葉樹資源活用に向け、町と地域内事業者及び広葉樹原木需要事業者等が連携した新たなサプライチェーンによる持続的な町有林経営の構築への支援を行いました。

この取組は、広葉樹資源の活用はもとより、ナラ枯れ被害拡大の防止や世代交代の促進、広葉樹材生産技術の継承等、林業分野にとどまらず、広葉樹林の適切な管理による生物多様性の維持という視点から、取組内容を一般市民へPRする必要があり、林業技術センターが実施しているみやぎ森林・林業未来創造カレッジ研修の広葉樹ビジネス講座と連携し、加美町産材による広葉樹材モデル製品として木製テーブル・チェアを製作し新築された加美町中新田公民館のロビーで常設展示しています。

これまでの取組による広葉樹材活用の方向性について知見をもとに、事業継続に向けた改善点を整理し、生産加工流通体制の構築に向け事業者への支援を行っていくこととしています。

○森林の持つ多面的な機能のさらなる発揮（7事例）

適正な間伐等施業に向けた森林経営計画の作成や、森林病虫害獣害対策のほか、ICTを活用した森林調査や森林経営管理法に基づく市町村による森林整備推進に向けた取組への支援を行いました。

事例16 ドローンを活用したスマート林業への取組

南三陸町において、森林調査や森林育成事業における補助申請へのドローンを活用したデータ収集や写真測量等に必要な技術やデータ解析手法について、研修会への参加を支援するとともに、森林整備課職員を講師とした写真測量に必要な飛行計画作成の実習を行いました。

ドローン等ICTを活用した森林調査は、機材の取扱やデータ解析等、手と頭を使うことが求められるため、各種研修への参加支援のほか、個別支援等への対応等、関係機関と連携した支援を継続していくこととしています。

○森林・林業・木材産業を支える人材の育成（11事例）

森林施業プランナー研修、中核的な林家や林業グループ活動の支援、高校生や小学生等への林業体験や森林環境学習の開催などのほか、みやぎ森林・林業未来創造カレッジの先行研修を行いました。

事例22 海岸地域環境を活用したまちづくりの取組支援

東日本大震災による大津波で壊滅的な被害を受けた東松島市の海岸防災林の再生に向けた取組を次世代に引き継ぐため、地域住民をはじめ、行政、民間団体等が一体となり、自然体験活動や森林整備等のイベントを定期的に開催し、地域住民参加型の海岸林管理体制に向けた取組を支援しました。

イベントに参加した大曲小学校の児童や大曲地区の住民からも一定の評価を得たことから、イベントから地域定例行事化への進化に向け、取組内容の改善を含めた関係者への支援を行っていくこととしています。

【普及指導チーム 伊藤 彦紀】



楽/学広場

センター主催の各種イベントや研修会の開催結果、今後の開催予定などをご紹介します。

◎種苗・育苗業務の現場便り

今年度は、数回に分けて場内で行われている種苗や育苗などについてレポートします。

第1回は、需要の多い少花粉スギの生産現状と大まかな生産工程について紹介します。

少花粉スギ挿し木苗の生産では、1・2・3・4・6号のスギ採穂園から少花粉スギ登録5品種（刈田1号、玉造8号、宮城3号、加美1号、遠田2号^{※1}）のスギ穂を採取し、ミストハウス及び馴らし床で発根・養生します。ミストハウスでは挿し床に保水性の高いパーライトを敷き、5か月間1時間毎に約1分間の散水を行います。令和3年度まではA棟・B棟・C棟のミストハウスに約100,000本を挿し付けていましたが、令和4年度は令和3年度にD棟を新設し約140,000本を挿し付けました。さらに、今年もE棟を新設する計画で令和5年度からは約160,000本以上の挿し付け規模となります。なお、最近4カ年の平均発根率は82%で令和3年度は少花粉スギ挿し木苗を83,800本販売しました。



スギ採穂園(2号)



ミニチュア採種園

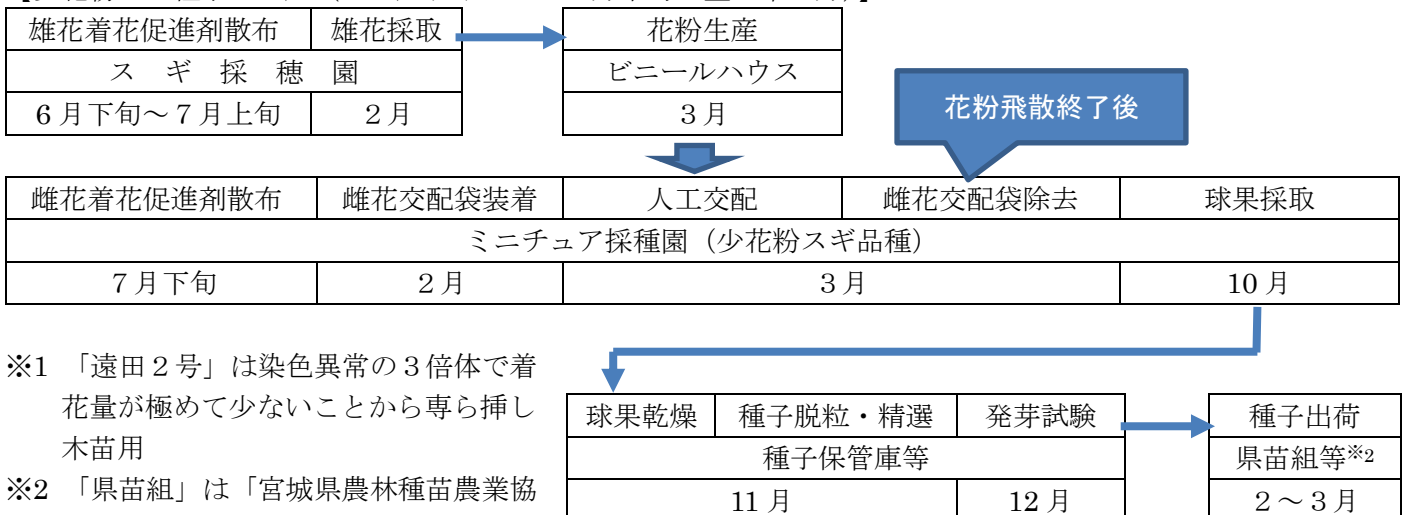
少花粉スギ種子の生産では、ミニチュア採種園の雌花にスギ採穂園の少花粉スギ登録4品種（刈田1号、玉造8号、宮城3号、加美1号）の雄花から採種した花粉を人工交配します。少花粉スギに着花させるため、「ジベレリン」（着花促進剤）を2回（雄花用と雌花用）散布します。また、雌花には少花粉スギ以外の花粉が授粉しないよう袋を被せます。ミニチュア採種園には県内外の少花粉スギ11品種が植えられており、自然交配でも少花粉スギ種子が採種できますが、そうではない種子も混じる懸念があることから、本県では人工交配を行っています。現在、当センターの少花粉スギ採種園は0.06ha（令和3年度少花粉スギ種子販売量0.2kg）ですが、令和3年度に半閉鎖系採種園2棟を整備（採種開始は令和7年度以降）、今年度も1棟整備し、少花粉スギ種子の生産量増産を図って参ります。

次号からは、「着花促進」や「種子脱粒・精選」などについて詳しくレポートする予定です。

【少花粉スギ挿し木苗の生産(1生産サイクル：2月～翌年4月)】



【少花粉スギ種子の生産（1生産サイクル：6月下旬～翌々年3月）】



※1 「遠田2号」は染色異常の3倍体で着花量が極めて少ないことから専ら挿し木苗用

※2 「県苗組」は「宮城県農林種苗農業協同組合」のこと

◎今年開催のイベントについて

森林・林業・木材産業に関する試験研究機関である林業技術総合センターを県民の皆様身近に感じて頂くために、今年度も関係団体と連携してイベントを開催しています。詳しい日時は県政だより、新聞、当センターのホームページを通じてご案内します。

なお、新型コロナウイルスの影響を考慮し中止する場合があります。

(1) SDGs マルシェ 2022

こちらは開催済となりますが、6月26日(日)、仙台市青葉区のサンモール一番町商店街において、尚絅学院大学主催の「SDGs マルシェ」が開催され、林業技術総合センターもこれに参加・出展しました。「SDGs マルシェ」は企業・行政・学生のグループ等が、それぞれのSDGsに関する取組みの紹介や研究発表を行う場で、今回、林業技術総合センターからは、「森の恵み きのこについて学ぼう」とのテーマで、県開発品種のハタケシメジ「みやぎ LD2号」の栽培方法や子実体の生長過程等に関する展示を行いました。きのこの栽培においては、資源のリサイクル資材であるおが粉やフスマ、トウモロコシの芯であるコーンコブ等を活用し栽培しており、栽培後もそれら資材は畑などの土壌に還元され堆肥として利用されることを来場者に説明することで、きのこ栽培のSDGsへの貢献についてPRすることができました。今後もイベント等の機会を捕まえ、身近な食材であるきのこの栽培方法や生態の紹介を通じて、きのこの消費拡大が環境保全や健康増進へ寄与していることを普及していきます。

【地域支援部 玉田 克志】



SDGs マルシェ 2022の様子

(2) みやぎ森林・林業未来創造機構「オープンカレッジ」

当機構では、みやぎ森林・林業未来創造カレッジや、機構が取り組む「就業環境向上を進めるプロジェクト」に関する情報を発信するとともに、現場の課題をテーマに関係者が交流し意見を交換する機会、学生や一般の方々が森林・林業に関心を高める機会を提供するため、昨年に続きオープンカレッジを開催します。今後機構で詳細を検討し、8月上旬に開催内容をお知らせします。多くの皆様の御参加をお待ちしております。

○開催場所：宮城県林業技術総合センター

○開催予定：10月14日(金)、15日(土)
(講師等の都合により変更になる場合があります)

○開催内容(予定)

①10月14日(金) 10:00~15:30

【プロジェクトシンポジウム&ワークショップ】

「林業のイノベーションと働き方改革」をテーマにした講演会、
分科会・ワークショップ

②10月15日(土) 10:00~15:00

【林業の安全とイノベーション交流会】(就業者向けプログラム)

チェーンソーマスター競技会、基調講演、関連企業新技術実演・情報提供・意見交換

【森林・林業とつながる・未来を広げる交流会】(一般・学生向けプログラム)

木育ワークショップ(カレッジ研修生参画)、森林をしらべるワークショップ(同左)
就業相談



昨年のプロジェクトシンポジウム

【機構事務局 小杉 徳彦】



職員面々

令和4年度からセンターに配属された職員を紹介します。

【企画管理部 技術副参事兼総括次長 千葉 利幸】

4月に北部地方振興事務所栗原地域事務所から赴任しました。林業技術総合センターは平成30年度の普及指導チーム以来2度目の勤務になります。器ではないとは思いますが、所長はじめ皆様から御指導いただきながら、楽しく業務を行って参ります。

今年度は、新たに開設した林業技術総合センターのユーチューブチャンネルやメッサみやぎなどを通じて、新築した事務・研究棟及び研修棟の紹介や試験研究、種苗生産業務、みやぎ森林・林業未来創造カレッジなどの情報を発信して参ります。

特に、日ごろあまり馴染みのないと思われるスギやクロマツの種子生産、スギ挿し木苗の生産などの場内業務の情報を分かりやすくお伝えして参りたいと考えています。

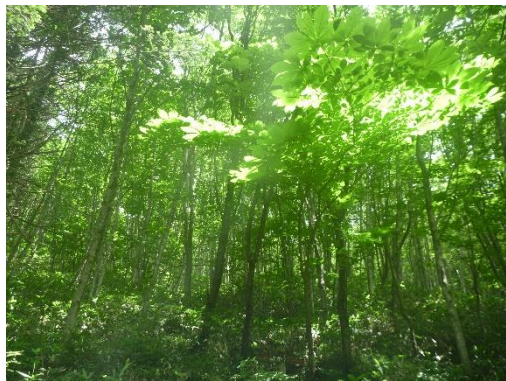
よろしくお祈いします。



【企画管理部 主任研究員 更級 彰史】

4月から9年ぶりに復帰しました。前回は特用林産研究に9年間従事しましたが、今回は林木育種研究を担当します。久しぶりに戻って感じたのは、土の匂いがする環境で仕事をするのは良い気分だなということです。林木育種は林業の基本の「キ」です。良い苗木が良い森林を造ります。しっかりと仕事で林業に貢献したいと思しますので、ご指導・ご鞭撻の程お祈いします。

また、林業における山の神信仰に関しても「知識の泉」編で連載を始めましたので、こちらもよろしくお祈いします。



【企画管理部 技術主査 松原 美衣子】

4月に東部地方振興事務所から赴任しました。自宅からセンターまでの通勤途中には、四季折々の様々な景色が遠景や近景から眺めることが出来、リフレッシュした気分が心穏やかに1日過ごすことが出来そうです。これまで許認可業務や林業振興業務を担当してきましたが、心機一転企画担当となりました。初めてのセンター勤務ですので、まずは研究員の方々が具体的にどのような研究をしているのか理解に努めてまいります。また、新研修棟の管理も担当していますので、講師の方や受講生が気持ちよく研修を実施・受講出来るような環境作りを心がけていきたいと思ひます。よろしくお祈いします。



【普及指導チーム 技師(普及指導担当) 山田 淳】

4月から赴任しました。センターは初めての勤務で、今年4月から本格開講した「みやぎ森林・林業未来創造カレッジ」を主に担当をしています。初めてづくしで悪戦苦闘しながら日々業務に取り組んでおります。カレッジの研修は林業を志望する方や既就業者で技能を高めたい方、業界について知見を深めたい方など、様々な研修生が受講されており、研修を進めていく中で研修生の皆様と一緒に林業を学ぶ機会と捉え、日々勉強をしているところです。

一日でも早くセンターに貢献できるよう努めて参りますので、よろしくお願いします。



【庶務 主事 松村 和樹】

新規採用職員として、4月から林業技術総合センターで庶務を担当しています。すべてが初めてのことで、慣れないことばかりで、毎日、学ぶことが多いですが、向上心をもって、何事にも積極的に取り組んでいきたいと思っております。1日でも早く業務に慣れ、皆様の力となれるよう頑張っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



編集後記

前回の発刊は2020年8月ということで、一時休刊しておりましたが、このたび約2年ぶりに再刊しました。前号では『林業技術総合センター建築日誌』の中で、「センターの研究棟・研修棟の建築工事が始まります。」とお知らせしたまま休刊してしまいました。気になっていた方がいらっしゃいましたら申し訳ございませんでした。その後、建築工事は順調に進み、2021年9月に竣工した建物は、構造を木造とし、CLTパネル工法等の新たな木材利用技術を積極的に導入したシンボリック的な建物となりました。職員一同、木のぬくもりをふんだんに感じられる建物で心機一転、仕事や研究・研修を行っております。

話は戻りますが、年に4回発行予定ですので、ご愛読どうぞよろしくお願いいたします。

【担当 M.M】



新本館（事務・研究棟及び研修棟）

宮城県林業技術総合センター

〒981-3602

黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14-1

TEL022-341-3262 FAX022-345-5377

[https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/stsc/
met
sa.html](https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/stsc/met
sa.html)



メッサ(METSÄ)とは・・・

森をこよなく愛するフィンランド人の言葉で「森、木」を意味します。